

第11週の発生動向(2007/3/12~2007/3/18)

1. 咽頭結膜熱については、八戸、むつ保健所管内において、第50週から**警報**が継続しています。
2. A群溶血性レンサ球菌咽頭炎については、東地方+青森市保健所管内(第5週~)、弘前保健所(第10週~)、むつ保健所管内(第49週~)において、**警報**が継続しています。
3. 伝染性紅斑については、むつ保健所管内において、第3週から**警報**が継続しています。
5. 感染性胃腸炎については、ほぼ横ばい状態ですが、今後も引き続き注意が必要です。
6. インフルエンザについては、報告数2,344人(先週比1,050人増)と増加傾向が続いています。詳細については、[インフルエンザ情報](#)に掲載しています。

第11週五類感染症定点把握 注:五類感染症定点把握疾病の警報・注意報については、二次保健医療圏単位で判定しています。

保健所名 疾患番号・疾患名	東地方+青森市		弘前		八戸		五所川原		上十三		むつ		青森県計		増減数 (前週からの増減)	東地方(再掲)		青森市(再掲)		定点数						
	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点	数	定点		数	定点	数	定点	数	定点	インフルエンザ (内科+小児科)	小児科	内科	眼科	基幹
(72) インフルエンザ	956	68.29	261	17.40	264	18.86	60	8.57	702	78.00	101	16.83	2,344	36.06	1050	49	24.50	907	75.58							
(59) RSウイルス感染症	1	0.11	2	0.22			1	0.20	2	0.33			6	0.14	-9			1	0.13							
(60) 咽頭結膜熱	1	0.11			22	2.44			7	1.17	8	2.00	38	0.90	11			1	0.13							
(61) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	31	3.44	42	4.67	8	0.89			19	3.17	18	4.50	118	2.81	17	1	1.00	30	3.75							
(62) 感染性胃腸炎	36	4.00	23	2.56	21	2.33	14	2.80	20	3.33	46	11.50	160	3.81	5	4	4.00	32	4.00							
(63) 水痘	20	2.22	6	0.67	9	1.00			9	1.50			44	1.05	-19			20	2.50							
(64) 手足口病															0											
(65) 伝染性紅斑					3	0.33	7	1.40	3	0.50	14	3.50	27	0.64	-13											
(66) 突発性発しん	5	0.56	6	0.67	3	0.33			5	0.83	4	1.00	23	0.55	2	1	1.00	4	0.50							
(67) 百日咳															0											
(68) 風しん															0											
(69) ヘルパンギーナ															-2											
(70) 麻しん(成人を除く)															0											
(71) 流行性耳下腺炎	20	2.22	16	1.78	6	0.67			10	1.67	5	1.25	57	1.36	-16	4	4.00	16	2.00							
(73) 急性出血性結膜炎															0											
(74) 流行性角結膜炎									2	1.00			2	0.18	-1											
(82) マイコプラズマ肺炎					4	4.00					2	2.00	6	1.00	-3											

は警報
 は注意報
 「空欄」: 患者発生数0

感染症の窓

性感染症 (平成17年-18年)

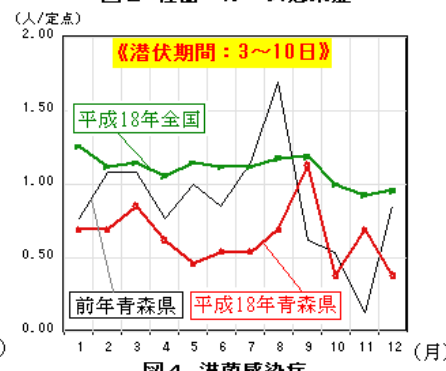
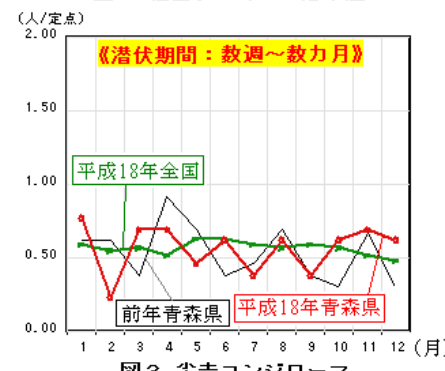
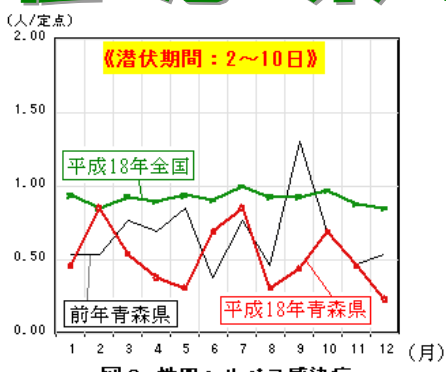
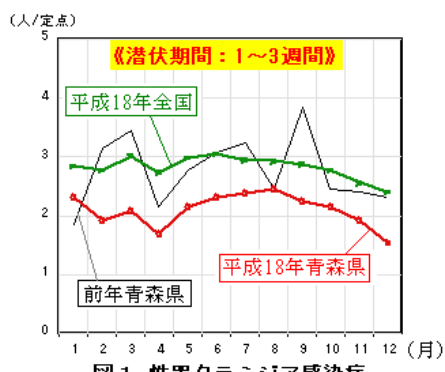


図1 性器クラミジア感染症: 平成18年は、全国より低い報告数で推移したものの、対象疾患のうちでは、最も多い報告数だった。
 図2 性器ヘルペス感染症: 平成18年は、2月、7月、10月にやや増加した。
 図3 尖圭コンジローマ: 平成18年は、季節変動も少なく、増減を繰り返しながら、全国に近い報告数で推移した。
 図4 淋菌感染症: 平成17年は8月に、平成18年は1カ月遅れの9月にピークを形成した。
 これらの疾患は、潜伏期間が長いことが多く(《グラフ上に表示》)、感染後も無症状で経過することもあることから、自覚が無いまましていると、人に感染させる危険があります。疑いがある場合は、医療機関での検査及び性行為の際にはコンドームを使用する等、確実な予防対策が必要です。